

派遣者番号	R2J03	氏名	長谷川 聡
研究主題 —副主題—	ポートフォリオ評価法を用いて自らの学習を自己調整する力を育む公民科授業実践 —PDCAサイクルの枠組みで捉え直す授業改善—		
派遣先	筑波大学 大学院	担当教官	唐木 清志
所属	都立東村山高等学校	所属長	川瀬 徹

キーワード：自己調整学習 メタ認知 ポートフォリオ評価法 PDCA

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

本研究の目的は、ポートフォリオ評価法を用いた公民科の授業実践が、生徒のメタ認知能力を高めることを明らかにすることである。

筆者が勤務する高等学校は、東京都ではエンカレッジスクールと呼ばれている学校である。これまでエンカレッジスクール2校に通算10年以上、公民科の教員として勤務する中で、生徒が学習への苦手意識を克服して自立的な学び手となるためには、学習を通じて自らが成長できている実感をもてるようになることが必要不可欠であると考えようになった。この実感をもてるようになるためには、学習を通じて何ができるようになったか、という自らの学習を俯瞰できるメタ認知が必要である。そこで授業を通じて生徒のメタ認知を高めていくことで、主体的に学習に取り組む力を養うことができると考えた。

今回の研究は、自己調整学習のプロセスのうちのメタ認知に焦点化し、ポートフォリオ評価法を用いて「現代社会」の2つの単元を開発・実践することで、生徒にメタ認知能力を身に付けさせることを目標とした。さらに、メタ認知能力の伸長が学習動機に対して与える影響の分析を試みた。しかしながら、1学期に行った1単元の実践では、メタ認知能力について期待される効果は量的分析によって確認できなかった。そのため、生徒の面接調査の聞き取り内容を質的に分析し、PDCAの枠組みで捉え直すことで授業改善を図った。その後、次の単元を実践し、その効果を量的・質的に分析した。

2 研究の方法

本研究では量的研究と質的研究の双方を用いた。

量的研究は質問紙調査をデータとして用い、ポートフォリオ評価法を用いた授業実践がメタ認知的方法の高まりをもたらすかについて、統計的仮説検定の手順に基づいた実証研究を行った。この仮説検定のために準実験法を用い、都内高等学校第3学年の6クラス(171人)をポートフォリオ評価法の実施状況に合わせ、以下の表1のように4つの群に区分し、処置群の授業は筆者が担当した。そして、①ポートフォリオ評価法を用いた授業実践前(5月、Time 1)、

②第一単元の授業実践後(7月、Time 2)、③2つの単元の授業実践後(10月、Time 3)、と3度の質問紙調査によるデータの変化を分析した。(表2)

表1 3つの処置群と統制群

	クラス種別	ポートフォリオ評価法	ポートフォリオ検討会
処置群1	普通1クラス(27名)	取り組む	実施する
処置群2	普通2クラス(56名)	取り組む	実施しない
処置群3	特進1クラス(32名)	取り組む	実施しない
統制群	普通2クラス(57名)	取り組まない	—

表2 質問紙調査で用いた質問項目

- Q1 あなたのクラスと出席番号を書いてください。(組番)
- Q2 あなたの現時点での進路希望を教えてください。
1 4年制大学 2 短期大学 3 専門学校 4 就職 5 未定 6 その他
- Q3 あなたは現代社会の学習は好きですか。
1 とても好き 2 どちらかといえば好き 3 どちらとも言えない
4 あまり好きではない 5 全く好きではない

Q4 現代社会の授業について、各項目についてあなたの考えに一番近いものに○をつけてください。

	とてもあ てはまる	ややあて はまる	どちらとも 言えない	あまりあて はまらない	全くあて はまらない
Q41 現代社会の学習をする時は、最初に計画を立ててから始めるようにしている。	5	4	3	2	1
Q42 現代社会の授業内容が理解できなくなったとき、自分がどこでわからなくなったか見つけるようにしている。	5	4	3	2	1
Q43 現代社会で勉強してきたことを確認するために、自分自身に対して質問するようにしている。	5	4	3	2	1
Q44 現代社会の教科書や資料を読んでいるときは、自分がどこまで理解できているのか考えながら読むようにしている。	5	4	3	2	1
Q45 現代社会の勉強をしていて何か難しい言葉があれば、自分が分かるような言葉に置きかえて理解するようにしている。	5	4	3	2	1
Q46 現代社会の教科書や資料を読んでいるとき、読んでいることと自分が知っていることを関係づけるようにしている。	5	4	3	2	1
Q47 現代社会の授業でのグループ活動では、相手の考えをふまえた上で自分の考えを理解してもらうようにしている。	5	4	3	2	1
Q48 現代社会の授業では「なぜこのことを学習しているのか」という今学習していることの意義を見いだすようにしている。	5	4	3	2	1

Q5 なぜあなたは現代社会を勉強するのですか?各項目についてあなたの考えに一番近いものに○をつけてください。

	とてもあて はまる	ややあて はまる	どちらとも 言えない	あまりあて はまらない	全くあて はまらない
Q501 現代社会の勉強が人なみにできないのはくやしから。	5	4	3	2	1
Q502 現代社会の勉強ではライバル(友だち)に負けたくないから。	5	4	3	2	1
Q503 現代社会の勉強はみんながやるから、なんとなくあたりまえと思って。	5	4	3	2	1
Q504 現代社会は周りの人たちが勉強するので、それにつられて。	5	4	3	2	1
Q505 現代社会の成績がよい方が、社会に出てからも得なことが多いと思うから。	5	4	3	2	1
Q506 現代社会の成績がよくないと、社会人になったときにいい仕事先がないから。	5	4	3	2	1
Q507 現代社会の勉強で得た知識は、いずれ仕事や生活の役に立つと思うから。	5	4	3	2	1
Q508 現代社会の勉強は仕事で必要になってからあわてて勉強したのでは間に合わないから。	5	4	3	2	1
Q509 現代社会を勉強することは、頭の訓練になると思うから。	5	4	3	2	1
Q510 現代社会を勉強しないと、頭のはたらきがおとろえてしまうから。	5	4	3	2	1
Q511 現代社会を勉強するのは新しいことを知りたいという気もちから。	5	4	3	2	1
Q512 すぐに役に立たないにしても、現代社会がわかること自体おもしろいから。	5	4	3	2	1

質的研究については、質問紙だけでは分からない処置群の生徒の内的な変化を分析するために、②第一単元の授業実践後、③第二単元の授業実践後、というそれぞれの時点において、面接調査やワークシート調査も行うことによって質的分析を並行して行い、量的分析を補完する研究とした。本研究では、抽出生徒（各クラス2人、計8人）を対象に行う2度の面接を中心に分析した。

3 研究の結果

(1) 量的分析結果

授業実践前（Time 1）、第一単元の授業実践後（Time 2）、第二単元の授業実践後（Time 3）、それぞれの時点での潜在変化モデルを用いて分析した。群ごとのメタ認知能力の初期値（Level）と変化（Change）を推定し、個人差を考慮した分析を行った。（Time 1-Time 3）では、特に処置群1の変化の推定値が大きく、統制群はマイナスの変化となっていることが分かった。この差が統計上有意であるかを確かめるために、パラメータの差に対する検定統計量を参照し、処置群1が他の全ての群に対して有意であることが明らかになった。（表3）

表3 (Time1-Time3) 群ごとの変化 (Change) の平均値

	推定値	標準誤差	検定統計量	確率
処置群1	0.801	0.190	4.217	***
処置群2	0.179	0.143	1.250	0.211
処置群3	0.198	0.150	1.314	0.189
統制群	-0.156	0.134	-1.156	0.248

(2) 質的分析結果

2度の抽出生徒のインタビューによる学習プロセスの変化をM-GTAを用いた質的分析によって、以下の図1にまとめることができた。

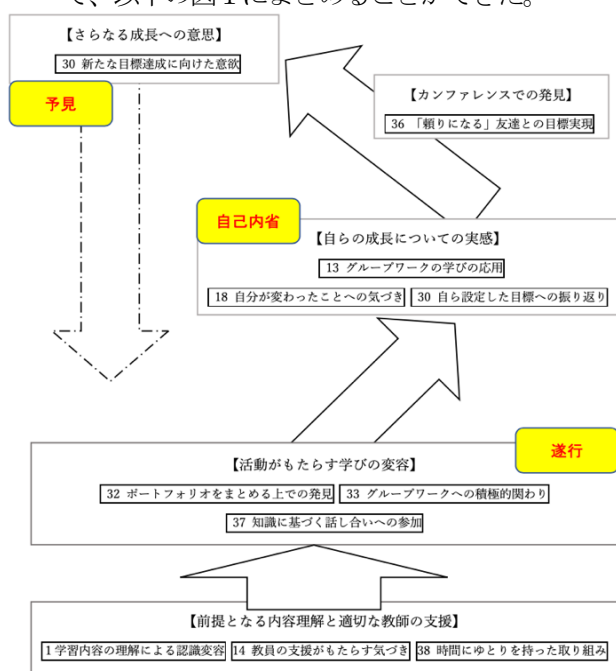


図1 M-GTAを用いた生徒の学習プロセスの結果図

この分析結果から、生徒のポートフォリオを用いた学習活動には、メタ認知だけでなく「予見—遂行—自己内省」という自己調整学習の3つの段階が表出していたことが分かった。そして、自己調整学習の土台には、「前提となる内容理解と適切な教師の支援」という概念が見いだされた。

4 研究の考察

本研究の成果として2点を挙げる。

第一に、ポートフォリオ評価法を公民科「現代社会」の授業で実践することでメタ認知能力が育成できることを、潜在変化モデルを用いた量的分析によって明らかにすることができたことである。特に、ポートフォリオ検討会を実施した群は、メタ認知能力の向上が著しいことが分かった。

第二に、面接調査での抽出生徒への聞き取りに対する質的分析によって、生徒の単元を通じた学習活動には、メタ認知だけでなく「予見—遂行—自己内省」という自己調整学習の3つの段階が表出していたことが確認できたことである。ポートフォリオ検討会によって話し合い活動を行うことが、メタ認知を高めるだけでなく、新たな目標達成への意欲も高め、自己調整学習の3つの段階の循環に寄与していることが分かった。また、自己調整学習の土台には「前提となる内容理解と適切な教師の支援」という概念が見いだされた。学習への苦手意識をもつ生徒が多い実践校での研究であったからこそ、生徒にとって土台の重要性は一層大きくなったと考えられる。

課題として2点を挙げる。第一に、一部の質問項目で、処置群3が他の群と比べて有意であった理由について、今回集めたデータからでは十分に説明することができなかったことである。他の普通科高校においても実践を重ね、どのような差異が見いだされるか今後検証する。第二に、メタ認知の方略と学習動機との関わりについて明らかにできなかったことである。今後もメタ認知の方略と学習動機との関連性について研究を続ける必要がある。

5 今後の展望

残された課題として2点を挙げる。第一に、令和4年度から実施される新学習指導要領を見据え、観点別評価の一つ「主体的に学習に取り組む態度」を今後具体的にどう評価していくかという点について、今回の研究ではテーマとすることができなかったことである。ポートフォリオ評価法を有効に観点別評価に組み入れる方策について、考えていく必要がある。

第二に、指導者の姿勢として、PDCAサイクルを回して授業改善を図る意義を考え続けることが挙げられる。日々の授業において、本研究の成果を生かして実践していきたい。